

---

# 英雄少女の狂詩曲

白群

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄少女の狂詩曲

### 【Nコード】

N8795Q

### 【作者名】

白群

### 【あらすじ】

題名も何も書かれていない怪しい本から異世界トリップしてしまった女子高生、天宮蓮。ここは王道に救世主として喚ばれたのかと思いきや、世界を滅ぼす力を持つ『双黒の聖霊姫』と、忌み嫌われた魔王みたいな存在のようだった。で、でも私、別に滅ぼす気なんてさらさらない！何故喚ばれたのか分からないけど、夢じゃないと分かった今、何とかして帰る方法を探さないと…。世界を滅ぼす存在だと思われていた少女が、世界を救った英雄と讃え謳われるまでの、道程を演じた狂詩曲<sup>ラテンディー</sup>。3/22あらすじ変更しました。不定

期更新でのんびり執筆していきます。

？

>br<

顔を出した途端、嫌がらせのようにギラギラ照りつける太陽。雲一つない見事なスカイブルーの空。今日の最高気温は38.7度。そう今は、受験生を除いた学生たちのパラダイス、夏休みの中盤である。

「よっしゃー！宿題終わったー！」

天宮蓮は達成感をたたえた笑顔を浮かべ、大きく伸びをした。夏休み初日から真面目にやっていた宿題が、遂に一言日記以外全てやり終えたのである。

鼻歌混じりで勉強机の上に散らばる宿題を片付け、学生鞆にさつさと入れる。そして立ち上がり、机に掛けてあった大きな紙袋を手にとって、ベッドにひっくり返した。

どさつと大量の本がベッドの半分を占領した。>br< 文庫本からA4型本まで、ほとんどがファンタジーものの作品である。

「宿題も終わったし、後5日は部活ないし、気兼ねなく読めるぞ！」

蓮は幼い頃から本が大好きだった。特に好きなのが、魔法や剣などが出てくる、現実では到底有り得ないファンタジーもの。

恥ずかしいので誰にも言ったことはないが、物語の騎士に憧れて、中学の部活は剣道部に入ったぐらいだ。

勉強も忙しい上、剣道部は練習量も多く厳しくて大変だが、とても楽しくて高校生になった今も続けている。しかし、大好きな本を読む時間は極端に減ってしまったが。

だからこそ、なんとかして読む時間を作っているのだ。>br<

蓮はわくわくどきどきと胸を高鳴らせながら、何を讀もうかと物色していると、見慣れない本に目を見張った。

「何これ……？こんな本買ったっけ？」

A4型本サイズの題名がない、使い古されたような薄汚れた黒い革表紙の本。

夏休み前に買いに行った、友達に教えてもらった古本屋は欲しかった本がたくさんあった。尚且つ高校生の少ないお小遣いでも余裕で足りる安い値段で売られていて、それはもう夢心地だったのは覚えてる。

だがこんな、まるで魔法使いの魔術書みたいな怪しい本、買った  
 だろうか。

「もしかして紛れこんでたのかな？」>br<>br< 古本屋のレジの、『お釣りが違います』と何度も言っているのに、何度も『何て言ったかの』と聞いてきた、よろよろしたおじいさんをふっと思ひ出す。しかし、もしお金を払っていなかったら悪いので、返しに行こうとその本を手にとった。

突如カツと本から眩しい光が溢れ、驚愕して本を放した。

「え！？何？！ちよつと？！」

まるで何台もの車のヘッドライトを当てられているように、手で目を防いでも、どんどん眩しくなっていく。そして、蓮は耐えられず目を閉じた。

$$\begin{array}{c} \circ' \\ \vdots \\ \circ \\ + \\ \circ' \\ \vdots \\ \circ \\ + \\ \circ \end{array}$$

「おい、じーさん！なんなんだよこれは！」>br<>br< それらを見たアレンは怒りと驚きの入り混じった声を上げ、常に無表情のティルでさえ呆然とした表情になっている。

「わしのコレクションじゃ」

今日の朝いきなり師匠に、裏庭のいつもは鍵で頑丈に閉じられた、立地面積の広い石造りの建物に呼びつけられた。

奥まで薄暗くて覗けないが、見える範囲の中はすごかった。天井まである棚に所狭しと置かれたというか詰め込まれた、良く分からないガラクタやら物凄い量の本。重さに耐えきれなかったのか、棚が崩壊しぐちゃぐちゃになっている所もある。

「二人にはここを片付けて欲しいんじゃ」>br<>br< そんな師匠の衝撃発言にティルが目を見開き、隣のアレンのこめかみの青筋がブチッとキレル音がした。

「何で俺たちがそんなことしなくちゃならねえんだ！ていうか有り得ねえだろ！この量は？！」

「わしの人生かけて集めたものだからの。かなり貴重なものから希少なものであるぞ」

「貴重ならちゃんと自分で整理しろよ！すげー埃まみれじゃねえか！」

「ここんとこ最近腰が痛くて咳も出て…もうわし一人では出来んじゃない…か弱い年寄りなんだからのう…」

「誰がか弱い年寄りだ！昨日街に行つて女遊びしてたじゃねえか！この色ボケじじい！」>br<>br<「ほっほっほ。まだまだわしも、お前のその貧相なモンよりは女を満足させられるぞ？」

「んだとこのくそじじい！」

始まつたら最低一時間は続く、親子喧嘩ならぬ祖父孫喧嘩に溜め息を付き、テイルは先に建物の中に入った。

灯り取りの窓のおかげでかなり薄暗いが、物の一つ一つは確認出来る。等身大の謎の石像が多数、絵のはまっていない美しい彫刻の額縁、そして本以外の形容し難い使い道の分からない物など…。以外に面白くてふらふらと見物していると、ふと足が止まつた。

何故だか分からない。高く無造作に積まれた書物のちょうど真ん中辺りの一冊が目にとまつたのだ。>br<まるで導かれるように、まるで操られているかのように、何の躊躇いもなくその本を抜き取つた。

どさどさどさつと大きな音を立てて、積みまれていた書物が床に落ち、むわつと濃い霧のように埃が舞い上がる。

テイルはそんなことお構いなしに、ただ穴があきそうなほどそれを見つめていた。

題名のない、薄汚れた黒い革表紙の何の変哲もないこの書物。何故こんなに惹かれるのか本当に分からない。しかし頭では分かっている、まるで手だけ別のものになつてしまつたかのように、表紙にそつと手をかけ、開いた。

途端に待っていましたと言わんばかりに溢れ出る、薄暗い空間を埋め尽くす神々しい光。>br<思わずテイルは書物を手放し、目を腕で覆いながら後退る。

“… やつと繋がった… 私たちの姫が…”

その時、心底嬉しそうな囁き声が耳に響き、ハツとして目を開けた。

光は消えていて、代わりに目の前に座りこんでいたのは、随分奇妙な服装をした、ぽかんと口の開いた間抜け面の、この世界では決して有り得ない黒目黒髪の大黒の少女だった。

> b r <

？

兎を追って穴に落ちてとか、衣装筆笥の中からとか、そういえばトイレで流されてなんて話もあった。

それでも夢見る乙女な私、異世界にトリップしてみたいなーと、ほんのちよつと夢には思っていた。

でもね、夢といっても、アイドルになりたいとかパイロットになりたいとか、夢は夢でもそういう実現出来る夢とは有り得ないほど次元が違う。

うん、夢に思いつつもちゃんとそこらへんは割り切って考えていましたよ？ 私ちゃんとした高校生だからね？ 小学生じゃないよ？

だからきつと、目の前のこの光景は、たまたま本を読みながら昼寝をしていて、そして夢をみているに違いない。うん、絶対そうだ。怪しい本が光って異世界だなんて、そんなアホな話があるかってんだ。ははは…

桜のようだか花びらが水色の花が散るぽかぽかと暖かな日差しの中、喫茶店のような白く丸いテーブルを挟んだ、痛いほど注がれる4つの視線から逃げるように冷や汗を流し俯きながら、蓮はただひたすらに思考逃避していた。

「…お前、名前なんつーの？」

躊躇いがちに話かけられ、心の中で起きろ起きろと叱咤していた蓮は、突然虚を突かれて豆鉄砲を食らった鳩のように飛び上がった。そんな怯えたように見えた彼女の反応に、金髪の青年も同様に驚いて慌てた。

「わ、悪い！ 驚かすつもりじゃなかったんだ」

ばつ悪そうに頭をガシガシ掻いて、安心させるように快活な笑顔を浮かべた。

「オレはアレグレッタ」シユタイン。アレンって呼んでくれ。で、こっちのだんまりで仏頂面がラメンティル」ターナー。こいつも名前長いからティルで良いよ。」

ティルと呼ばれた隣に座る青年も、読めない無表情だが別に異論は無いと頷いた。

飲み込めない状況に、不安で高鳴っていた胸の鼓動も、次第に落ち着きを取り戻していた。自己紹介もしてくれたし、きっと悪い人ではなさそうだ。

「私は天宮蓮と言います」

「アマミヤレン…全部名前か？」

「いえ、蓮だけです」

「へー、レンか。良い名前だな」

初対面の人に名前を誉められるなんて初めてで、戸惑いながら蓮はありがとうございますと頭を下げた。

すると、コトンと目の前のテーブルに良い香りのティーカップが置かれた。ふっと視線を上げると、白い顎髭を蓄えた優しい蒼い目の、かなりのご年配のおじいさんが立っていた。

「それでも飲んで落ち着くんじゃ。美味しいクッキーもあるぞ」

ほっほっほと明朗に笑って、嫌そうな顔のアレンの隣に座った。

「げ、ハーブティーかよ…オレ好きじゃねえんだけど」

「我が儘言っでない。馬鹿孫が」

「チツ…嫌いなもの知ってて淹れやがったな…ああ、レン。このじじいはオレの祖父のマエスタ。趣味は女遊びの色ボケじじいだ」

「お前も似てるもんじゃろ。まあ、もつともお前は女逃げられじゃろうが」

「いつオレが女に逃げられたんだよ?!」

いきなり目の前で始まってしまった口喧嘩に、蓮がどうしようとお口オロしていると、ティルが気にするなと静かに声をかけた。

「いつものことだから、心配しないでくれ」

無表情でティーカップ片手にクッキーを頬張る青年を、蓮もハーブティーを両手で包み込むようにして飲みながら、チラッと盗み見て先ほどの記憶を巻き返してみた。

明るく己の部屋から一転し、埃っぽく薄暗い場所。ふっと見上げれば、右頬に大きな傷があるかなり背の高い無表情の男性。そりやびっくりしない訳がない。本から光が出てびっくり。そして更にびっくりその上正直すごく怖かった。でも陽の下に出てみると、まだ結構怖いけど、それなりに気も使ってくれるし、以外に優しい人なのかもしれない。寝癖だらけのちよつと錆びた十円玉みたいな色の短髪に、神秘的な暗い深海の濃藍の瞳。宝石みたいできれいだなっ

てとても思う。うん、モデルさんみたいにかっこいいし。

盗み見どころかまじまじと見つめる蓮に気付き、ティルはちょっと訝しげな表情で彼女を見た。

「…なんだ？」

「へっ?! い、いやあの…二人共仲良しだなんて思ってた…」

あなたについて考えてましたなんて恥ずかしくて言える訳がない。ちよつと赤くなつて慌てて隣の二人についての話題を上げると、喧々囂々と口喧嘩していたアレンがはあっ?!と、信じられないといった表情でバツと蓮に視線を移した。

「これのどこが仲良しなんだよ?!」

「よくケンカするほど仲が良いとか言いますから。仲良しなのかなって」

蓮は自分も妹とよくケンカするけど、結構仲は良いことを思い出しながら、啞然とするアレンに言った。

それを聞いて、ティルは目を見開き、マエスタは吹き出した。

「流石、双黒の聖霊姫は言うことが違うの。わしらのことを仲良しだなんて言つたの、お前さんが初めてじゃ」

何故三人が驚き笑うのか蓮は不思議だったが、それより、聞き慣れない単語の方が気になった。

「あの、双黒の聖霊姫って…何ですか？」

「何って…お前さんのことだが？」

へっ？私のこと？

「ど、どういことですか？」

「ん？聖霊様から使命なんか告げられていないのか？」

せいいいさま？から使命？

初耳過ぎる単語に蓮がぼかんとしていると、三人が顔を合わせ、マエスタがうーむと唸った。

「おかしいのう…双黒の聖霊姫は聖霊様の使命を受け、そして世を正しく導くと言われてるんじゃないが…」

「双黒ただけであって、聖霊姫じゃねーか？」

「それはない。レンからは微弱じゃが聖霊の力を感じる。これは人として有り得ないことじゃ」

そのマエスタの言葉にティルも頷いている。せいいいの力？

「あの、よく分からないんですが…なんかすみません…」

そのお告げとやらを聞いていないことに、何だかよく分からないが少し罪悪感が出て、申し訳ない気持ちになってうなだれた。

「おいおい、別にレンが悪い訳じゃねーよ。だから謝るなって」

「そうじゃな。ただの言い伝えじゃ。すまないのレン。くだらんことを言って」

「い、いえ！大丈夫です」

こんな見知らぬ人間にも親切にしてくれるなんて、なんて優しい人たちなんだろうと蓮は感銘を受けた。うーん、やっぱり夢だからなのだろうか？でも本当に気になる。何だろ聖霊姫って。

「すみません、その聖霊姫について詳しく聞いても良いですか？本当に私なのかも分からないので……くしゅん！」

暖かった日差しがいつの間にか鉛色の雲に阻まれ、肌寒い風が薄い生地 of 長袖シャツと短パンの蓮を襲った。マエスタがふっと空を見上げ、眉をひそめる。

「まだ昼前なのに少し風が冷たくなってきたのう。残りは昼飯でも食べながら家の中で話すでしょうか」

他の三人も一様に頷いた。

？

案内された家の中は、調度品から家具から色彩まで妙に外国情緒たつぷりの内装だった。蓮自身は日本から一度も出たことはないが、外国の映画やテレビドラマで見たような覚えがある。しかし、欧米っぽいとも言えるし、アジアっぽいとも言えるし、何っぽいと聞かれても取り敢えず日本っぽくはないとしか答えられない。

汚そうな靴下を脱いで素足のまま、あつたかい何かの動物のふわふわの毛革ソファに腰掛けながら、蓮は応接間のような部屋をキョロキョロと見渡していた。

しばらく経って、部屋の奥へと消えた三人のうち、お盆を持ったアレンだけ戻ってきた。

「あれ？二人はどこへ行っただんですか？」

「あーうん、ちょっと外にな。すぐに帰ってくるさ」

どうしてまた外に？とは気になったが、あまり深入りして聞くのも良くないと思い立った蓮の隣りに腰を下ろし、目の前のテーブルにお盆を乗せた。それには、良い感じに溶けたチーズをのせた丸い形のスライスされたパンと、恐らく牛乳らしい飲み物が入ったマグカップが二組あった。

ハイジのパンみたいと蓮が感動していると、香ばしい匂いに刺激されたらしくお腹がぐーっと鳴った。途端恥ずかしくなつて、真っ赤になると、アレンが堪えきれなくなつたように吹き出した。

「お前面白いやつだなー。青くなったり赤くなったり笑ったり。見ててホントに飽きないぜ」

「…なんかスミマセン…」

「何謝ってんだよ。やっぱり面白いなーレンは。ほらこれ食べよ。腹減ってんだろ？オレはいらねえからさ」

笑われてるのが恥ずかしくてアレンと目を合わせず、俯いたままパンを受け取って頬張った。シンプルなのにすごく美味しくて、蓮は目を輝かせてひたすらもぐもぐ食べていた。

半分ぐらい食べた後、ふと視線を感じて顔を上げると、何だか変に不思議な表情をしたアレンと目があつた。

「ああ、食べてる最中悪いな。気にしないでくれ」

気にしないでと言われても気になるものは気になる。だが、取り敢えずパンを食べてからにしようと思い立ち、そして食べ終わった。

「ごちそうさまでした。すごく美味しかったです」

「そーか？悪かったな。こんなのしかなくて」

「いえ、私こんなに美味しいチーズとパン初めて食べました！本当に何から何までありがとうございます」

感謝の笑顔と律儀に頭を下げる蓮。アレンは何か思案するようにしばらく蓮を見つめ、そしてため息をついた。

「オレ本当に信じらんねえぜ…お前がああ聖霊姫ってこと」

その困ったような呟きに、蓮は首を傾げた。アレンは立ち上がり、

目の前の壁に掛けてある読めないが文字のような刺繍が施されたタペストリーの横に立った。

「『光と闇の均衡が傾き世界が崩落するとき、闇に愛された美しい容姿を持ち、光に祝福された純粋な心と力を持った双黒の聖霊姫が正しく導くであろう。』まあ、これがこの領地に伝わる双黒の聖霊姫のことだ」

世界を正しく導く…なんか勇者みたいでかつこいいかも。しかし、それが全く他人事ではないことだとハツとした。

「えっと…それが私？」

「一応じーさんの御墨付きだしな。オレには聖霊の力とかは分かんねーけど…」

うーんと何か言いにくそうに言葉を濁し、タペストリーを見つめながら難しそうな表情で頬をポリポリと掻いた。

「でも実はさ、他の領地っていうか街っていうか、まあオレの故郷ではかなり違って…」

壮大すぎるその内容に呆然とした蓮に視線を移し、意を決したように口を開いた。

「『闇を纏う双黒の聖霊姫が現るとき、その卓越した恐ろしき力で光を侵食し世を滅びに導く』ってな」

世を滅びに導く…それも魔王じゃん、なんかすごいなー。しかしまたもや、それが他人事ではないことだと愕然とした。

「…それも私…何ですか？」

「そう、らしいよな」

勇者でもあり魔王でもある。なんか斬新だけどあまりに極端すぎる。せめてどっちかにしてほしい。…でも…選べるならやっぱり勇者の方が良いかも…。蓮は恐る恐る質問してみた。

「一体…どっちが正しいんですか？」

「正しいっつーか…どっちを信じてるかって感じだな」

「信じる？」

「例えその答えが間違いだとしても正解だと思ってたら正解だろ？善からみれば悪は悪、悪から見れば善は悪とかな。聖霊姫が世界を救うのが本当に正解だったとしても、世界を滅ぼすが正解だと信じてる奴から見れば間違いのようなもんだ」

予想以上にレベルの高い返答が返ってきた。えっと…つまり…うーんと…。

「聖霊姫は世界を救うのに、滅ぼすって思っている人が多いってことですか？」

「いや、それが本当に救う存在なのかも分からねえんだよな。この2つの聖霊姫の伝説だって眉唾もんだし。というより、今この国が危機的状況にあるのかさえ分かんねえし」

あー！さらに頭がこんがらがってきたー！蓮は必死に頭をフル回転させて考えていると、知らぬ間に再びアレンが隣りに腰を下ろしていた。

「まあでもさ、実はオレも双黒の聖霊姫は悪で正解って信じてた方で。最初あの倉庫でお前を見た時、あ、この世も終わりかって思ってたんだ。テイルは何考えてつか分かんねえけど、喜んでたじーさん見て信じられなかったぜ、本当」

アレンはおもむろに蓮の肩にかかる黒髪を一房手にとり、じつと彼女の目を見つめた。

「でもよくよく見てみると、髪と目の色が違うだけで別に他の女とほとんど変わんねえなって思っで。国を滅ぼすなんて出来る訳ねえよな」

見事に晴れ渡った空のように透き通った蒼い瞳に見つめられ、何だか変に落ち着かない心地に陥った。うーん、でもホントきれいに整った顔だなあ…。テイルさんも格好良かったけど、また違う格好良さなんだよね。もっと大人な感じがするって言うか…。艶があるって言うのかな？いったい何歳ぐらいなんだろ？そんなこと考えていたら、知らずに口からポロリとこぼれた。

「アレンさんっていくつなんですか？」

「…は…？」

アレンの動きがビシッと止まった。

「いや…今聞くことか？普通？」

「…す、すみません！ただ気になっただけで…言いたくないなら別にいいんで！」

わたわたと慌てて謝る蓮を見て、アレンは呆れたような溜め息をついて彼女から少し離れた。

「お前ってさ、よく天然とか言われんだろ」

「あ、はい。どうして分かったんですか？」

「…どうしてって…」

ついでにもうひとつ溜め息をついて、まあ、いいかと呟いてちょっと悪戯っぽく微笑みながら、蓮の頭に軽くポンと手を置いた。

「歳教えてやってもいいけど、一つ条件な。そのさん付けと敬語止めてくれ。好きじゃねえんだ」

「え！でもアレンさんは年上そうですし、年上は敬うのが…」

「ほら、さん付けしない」

「う…ア、アレン…」

さんを付けないように何とか踏みとどまった。

「で、でも敬語は少し待って下さい！まだ出会ってばかりなのに、そんな簡単には出来ません！」

部活のルールや家訓の一つがまず年上には敬語だったため、そうそう長年のくせは直せない。必死に手を合わせお願いをする蓮。アレンは数回瞬きし、ふっと笑顔になってそのまま蓮の頭をわしゃわしゃと乱した。

「ド天然にクソ真面目かよ。こりゃあ難攻不落だな」

「な、難攻不落？何がですか？」

答えずに、ただとても面白そうに笑うアレンに、頭髪をぐしゃぐしゃにされながら首を傾げる蓮だった。

「ああ、そうそう、オレは24。レンは？」

「私は17です」

「17か、ティルの一つ下だな」

やっと解放してもらい、蓮の髪を直していたその手がぴたりと止まった。

「テ、ティルさんって18なんですか？！」

アレンよりはなんとなく年下のような気がしていたが、少なくとも二十歳はいつていると思っていた。まさか十代、驚きだ。

「あいつ無駄に背えたけえし、いつも無表情だから老けて見えるよな。歳の差結構あんのにオレより年上に見られる時あるし。だけどあー見えて、甘いもん好きだったり趣味が料理だったりすんだぜ？」

「い、意外です…」

甘いものが好きというのは共感できるが、趣味が料理というのはすごい。自宅の電子レンジ爆発させかけたり、調理実習でクラスで唯一10段階評価の1を付けられた経験のある蓮は、物凄く尊敬に値すると思った。

「だろー？あんな見た目なのにさ。確かに料理は旨いけど、エプロン付けたティルの姿はおもしろ」何の話してるんだ？」

ハツと二人が振り返ると、いつもの無表情…よりちょっと眉根が寄ったティルが立っていた。二人が座るソファの後ろには扉はない。一体どこから入ってきたのだろう？

「お、お前いきなり真後ろに飛んでくんやよ！マジびっくりしたじやねえか！」

「俺の話をしていたからか？」

「ど、どこから聞いてたんだ？まさかエプロンの話を…」

そのエプロンに心あたりがあったのか、ティルの眉根がさらに寄り不機嫌そうな顔になる。う、口が滑ったとアレンが慌てて口を閉じた。だが、気まずい空気を知ってか知らずか、蓮は目をきらきら輝かせ口を開いた。

「ティルさんって料理出来るんですね！」

ティルは面食らって蓮を見た。

「すごいです！私料理作れないから尊敬しちゃいます！」

変な沈黙が落ちた後、ティルはアレンとふっと目を合わせ、そして蓮に視線を戻した。

「お前：変なやつだな」

ただ正直に言ったただけなのに、どこが変なんだろう？そういうえば、アレンには面白いと連発されていたし。本当によく分からない。

「私のどこが変で面白いんですか？」

思いつきり首を傾げる蓮を見て、ティルは微妙な表情に、アレンは可笑しそうに笑った。

「天然で真面目だろ？面白ねーよな」

「…面白いというかわわっている。双黒の聖霊姫だからなのか？」

「魔術師でもねえオレに聞くなよ。だけどほんと参るよなあ…。折角落とそう思ったら…」

アレンの最後の聞こえるか聞こえないかぐらいに小さい呟きに、ふっとティルが表情を変えて視線を移した。

「やっぱりそのつもりで…」

その侮蔑にも近い冷ややかな視線に、アレンは慌てて弁論に走った。

「あ、いやその！最初からそういうつもりじゃ…なんていうか、その気にさせられたっ…かなったというか…」

「…師匠が先に帰れと言った意味が分かった」

「やっぱりあのじじいの入れ知恵か！別にその気にはなっただけで手は出してねえよ！」

「…本当かレン。大丈夫だったか？」

突然話を振られ、返事にちよつと間があいた。

「あ、はい、パンをご馳走になって聖霊姫について教えてもらいました」

「それだけか？嘘付かなくて良い」

「おい！どんだけオレ信用ねえんだよ！」

「いつもの行いが悪いから」

「だからって、そこらへんの良識ぐらいはあるわ！」

激して更に言い募ろうとしたアレンに、何かを思い出したティルがああと声を上げて制した。

「師匠が呼んでいた」

「って、今言うタイミングかよ…。jeeさんが？」

「風化の街の入り口で待っていると云っていた。数日かかるかもしれないから準備して来いと」

「数日：　　たく面倒だけどうしょうがねーか」

かったるそうに立ち上がって、アレンは不思議そうに見つめる蓮に気付いて笑顔を向けた。

「すぐ帰ってくつから。待っててなレン」

再び蓮の頭をぐしゃぐしゃにかき混ぜて、扉の奥へと消えてしまった。

ちよつと呆けながら髪を適当に直していると、ふとソファアの横に立つ無表情に戻ったテイルと視線が合った。

「…部屋に案内する」

そつぶつきらばうに言い、扉の奥へと消えかかったテイルを慌てて蓮は追いかけた。

？

フツと気付くと、あれからもう3日も経っているのに気が付いた。あの後、ティルさんに自室ぐらいの懐かしい広さの部屋に案内してもらって、簡素なワンピースのような服と布のズボンを借りて…それから…昼過ぎだというのに何だか疲れて、お日様の香りのふわふわのベッドで寝てしまったらしく、気が付いたら朝日が眩しく輝いていた。その時、いつの間にか毛布がかかっている、きつとティルさんだと思ってお礼を言ったら、顔を背けられてしまった。…何か悪いことしちゃったかな…？

それから1日は、二階建ての家が丸々一軒入りそうな物置の掃除を手伝った。ティルさんにはしなくて良いって言われたけど、他にやることもないし、ご飯を頂いている身としては何か役に立ちたかったから。

そして更に次の日、暖かな木漏れ日の中、地べたに置かれた埃まみれの呆れるほどの山積みの本を、一生懸命一冊ずつ乾拭きしている最中だった。

さらりとやわらかな風が頬を撫で、手を止めて顔を上げた。

桜に良く似た、しかし決定的に違う水色の花びらの花が咲き乱れる、樹齡何百年も経っていきそうな巨木が視界いっぱい広がる。

水色の桜なんて、有り得ない。本から異世界トリップなんて、有り得るはずがない。

そんなおとぎ話のような、まさにファンタジーな話なんて、決して。

だからすぐに夢を見ているんだと思っていた。アレもティルさんもマエスタさんも、この桜もあのパンも、全部不思議な夢。醒めるまで待っていたのに、一向に醒めることがない。

試しに頬を抓ってみた。痛いだけ。前と同じように目を閉じて起きる起きると念じてみた。瞼を上げてても変わらない。…そんな…

まさか…。

「…夢…じゃないの…？」

蓮の掠れた小さな呟きに、まるでその通りと頷いたように、風に煽られ花々がざわめいた。

夢ではない。それはつまり、現実だということ。目なんか醒めない。だってもう醒めているから。

その時、真後ろからドサツと、重いものを少々乱暴に下ろしたような音に気付き、振り返った。

「本はこれで最後だ」

高く積まれた埃まみれ本に片手を置き、さらに埃まみれのテイルが額の汗を腕で拭っていた。拭いたのを抜いても百冊以上ありそうだ。まだまだ終わりそうにない。

だが、何だかやる気にはなれなかった。いまが夢なのか現実なのか分からない。

テイルは複雑な表情で俯く蓮を黙って見つめ、しばらく突っ立っていた後、そのまま本を挟んでとなりに座った。そして側に落ちていた乾いた布を取り、黙々と本の埃を拭い始めた。

蓮はテイルの頬から首にかけて長い傷が残る横顔を見つめ、おもむろに視線を目の前に移した。

「これ、桜ですか？」

手を止め、テイルも顔を上げた。

「よく知ってるな」

「…？珍しい木なんですか？」

「この一帯にしか咲かない花だからな。知ってる方がまれだ」

「そうなんですか…こんなにきれいなのに…」

少し残念に思う。水色の桜。青空より薄いから、まるで一夜の夢のように儚げで、普通の薄桃色の桜より幻想的。

「…レンの世界にはあつたのか？」

ハッと蓮は目を見開きテイルを見た。テイルの表情は相変わらずよく分からない。だが、その言い方はまるで…。

「…ここは…異世界なんですか…？」

「レンから見たら、そうなるだろうな」

二度寝て起きても変わらない。何しても戻らない。信じたくはなかったが、もう心のどこかではこれが現実だと分かっていたようだ。そこまでびっくりしなかったことに驚いた。

「どうして…分かったんですか？」

「黒目黒髪はこの国…いや、この世界には絶対生まれない」

「でも、まさか異世界からなんて」

「着てた服も見たことは無かったし、双黒の聖霊姫は異世界より喚ばれると言つ逸話もある」

「そう…だったんですか…」

しばらく沈黙し、そしてまた蓮が口を開いた。

「実は私、最初は夢だと思ってたんです」

「夢？」

ティルは不思議そうな顔をする。

「本が光ったと思ったら、こんなところにいたんです。普通は有り得ないですから」

「…有り得なくはない」

「えっ？」

次は蓮が不思議そうな顔になった。

「それは媒介移動術という魔術だ。魔術書を媒介に飛んできたんだろっ」

まじゅつ…魔術？！

蓮はぎょっとした。

「魔術を知らないのか？」

「し、知ってるは知ってますが…この世界には魔術師がいるんですか?!」

「師匠…アレンの祖父がそうだ」

「マエスタさんが?!」

優しくてちよつとお茶目なマエスタが頭に浮かぶ。そんな感じには見えなかったが、まさか魔術師なんて…。

「あれ?師匠ってことは…ティルさんも魔術師なんですか?」

「いや、まだ見習いだ」

今度はティルがぎよつとする番だった。蓮が瞳をきらきらさせ、詰め寄ってきたからだ。

「お願いします!ちよつとで良いから魔術を見せて下さい!」

「な…そんな珍しいものではないだろ?」

「私の世界では珍しいどころか夢か本にしか出てこないんです!」

目と鼻の先にまで詰め寄られ、ティルは拭き途中の本を放し、慌てて身を引く羽目になった。

「わ、わかったからちよつと離れてくれ」

「はい!」

再び指定位置に座り、わくわくどきどきと表情を輝かせる蓮に少し戸惑いながら、ティルは目を閉じて呪文を詠唱した。

途端、目の前にふわりと火の玉が浮かんだ。手のひらサイズの綺麗な青い狐火。目と鼻の先なのに全然熱くない。

「これは炎術の一つだ」

触っても熱くないと言うので、恐る恐る触れてみる。ほんとだ、火なのに全然熱くない。うちで飼っている猫のように、ほんのり温かくて何だかホツとする。

「あ、この前アレンといた時のも…」

「ああ、あれは瞬間移動術だ。テレポーションとも言うが」

ファンタジー小説歴十数年。まさか魔術師に会えるなんてと、感動で胸がいっぱいだった。もしかして…。

「騎士とかもいたりしますか？」

「元だが、アレンがそうだ」

「ア、アレンが?!」

優しかったがノリは軽いいし誠実そう…にはちょっと悪いがあんまり見えなかった。だが、体つきはテイルよりがっしりしていたし、剣道部の男子に良く似ていたのを思い出す。マエスタといい、本当に血が繋がっているんだと感心した。よし、アレンが帰ってきたら色々話を聞いてみよう。

「本当に嬉しい…憧れの騎士に会えたなんて…」

「騎士が憧れ？変わってるな」

「そうですね。そこは変わってるって認めてます」

「…（そこだけじゃないと思うが…）」

テイルはそう思ったが、何となく口には出せなかった。蓮は目の前の火の玉が飼い猫に見えてきて、何となくずっと撫でている。

「小さい頃に、騎士がお姫様を悪い竜から救う絵本を読んで、ずっと憧れなんです。大切なものを命をかけてでも守り抜く、その生き様が格好良くて素敵で…惚れたんです。私もそうなりたいて」

真っ直ぐ桜を見つめる漆黒の瞳。テイルは驚いて、少しだけ目を見開いて蓮を見ていた。彼自身、あまり他人とは接したことはないだが、こんなにも強く凛として、純粋で綺麗な瞳は見たことは無かった。

「まあ、こんな小娘が何言ってるんだって感じですけど…」

何だかちょっと恥ずかしくなって、えへへとごまかし笑いを浮かべる蓮の頭の上に、ポンとテイルが手をおいた。

「そんなことは無い。俺は立派だと思う」

テイル自身、知らず知らずのうちに微笑んでいた。蓮はちょっとびつくりして、何故か少し胸の奥が弾んだ。何だろう？今の…。だけれどそんな疑問より、嬉しさの方が上回った。

「ありがとうございます。そう言ってくれたの、テイルさんが初め

てです。それに…ちょっと安心しました。私、テイルさんに良く思われてないのかなって思ってたんで」

「何？」

テイルは怪訝そうな表情になった。

「一昨日お礼を言っても素っ気なかったし、あんまり話かけない方が良いのかなって思って」

「それは…そのだな…」

手を戻し、そっぽを向いてテイルは言い淀む。顔はよく見えないが、少し耳が赤いような…手のひらの狐火もほんのり赤みを帯び始めている。

「別に嫌いだとかそういう理由じゃない。ただ…慣れていないというか…驚いたというか…」

歯切れの悪い答えに蓮は首を傾げるばかり。でも、嫌われてないなら良かった。安堵と嬉しさで蓮はにこにこ笑っていると、突然テイルが立ち上がった。

「…拭いた本を持って行く…すぐ戻ってくる」

手早く本を積み上げ、顔を見せずに蓮が声をかける間もなく、家の中に消えてしまった。一体全体どうしちゃったんだろ？

残された蓮はしばし彼の消えた扉を見つめ、そして再び桜を見上げて一つ小さいため息を付いた。

「帰れるかな…私…」

…うん、きっと方法があるはず。私が何故喚ばれたのか分からないけど、何とかして帰る方法を見つけないと。

でもまず、恩を返さなくちゃと、本の埃拭きを再開した。

？

優しい風が頬を撫でる。さらさらさらり。

木々がその風を受け、枝を揺らし心地の良い音楽を奏でる。ざわざわわり。

気付けば、私は一人森の中にいた。人間が何人いても一回り出  
来ないような太い幹の、天を仰ぐように高い歴史を感じる古い巨木。  
私の背丈より低い、まだまだ途方の無い年数のかかるだろう瑞々し  
い若木。大小、高低様々の樹木たち。

ああ、ここはとてもほっとする。まるで大きなものに優しく慈し  
まれながら、包まれているような安心感がある。

！  
…

一瞬、何か聞こえたような気がした。振り向いても、辺りを見  
渡しても誰もいない。

！ 姫… 私たちの愛しの姫…

やっぱり聞こえる。苦しそうで悲しそうで、でも慈愛に満ちた優  
しい声。

あなたはだれ？

！ 風化の街へ… 私に… 私たちに救いの手を…

突然ごうと風が大きく鳴り、木々は激しくざわめき、とっさに目  
を閉じ耳を塞いだ。

そして、何も聞こえなくなった。

。' . :。 + 。' . :。 +

それを聞いたテイルは、朝食の片付けをしながら盛大に眉をひそめた。

「風化の街へ？何故だ」

皿を拭く手伝いをする蓮は、夢のことを正直話すか躊躇った。思わず目を伏せ、どうも元気の無い蓮の様子をテイルは難しい表情でしばし見つめ、思い出したように皿を再び洗い始めた。

「今、風化の街へ行くのは危険だ。妖魔が出没している」

「ようま？何ですかそれ？」

「人の血肉を好物とする化け物だ」

蓮は目を見開き手を止めた。

「まだ噂だけで見たことは無いが、微かにあの場所で穢れを感じた。妖魔がいる可能性は高い」

「…救いの手を…」

あの耳に残る、苦しく悲しい、それでも優しい、胸がつかえるようなあの声。危険と分かったとしても、ほっとくなんて出来ない。

「昨日、夢を見たんです。誰かが私に助けを求める夢を」

「夢…だと？」

「声だけで姿は分からなくて、それに何で私を姫とか呼ぶのか分からなくて…分からないことだらけなんですけど…でも行ってみたいんです。風化の街に」

皿を置き、正面から真っ直ぐ見上げるその真摯な目に、ティルはハッと息を飲み、そして、溜まった息を吐き出した。

「…俺もアレンや師匠の帰りが遅いのが気がかりだった。だが、蓮一人で留守番させるのは出来ない」

「え…それじゃあ…」

「分かった。一緒に行こう」

パアッと顔を輝かせ、ありがとうございますと深々と頭を下げた。ティルもしようがないとは言いつつも、嫌な表情はしていなかった。

「だがいいのか？あの魔術書、あと少しで解読出来そうだが…」

チラリと蓮は、テーブルの上に置かれた古ぼけた黒革の本に視線を移した。ティル曰く、これがこの異世界へと来ることになってしまった元凶らしい。確かに古本屋で買ったあの本と瓜二つだ。解読

出来れば、帰ることが出来るようなのだ。

「きつと今帰ったら後悔します。それに、帰るんだったらちゃんとアレンとマエスタさんに挨拶してからじゃないと」

ティルは目を瞬かせ、そして可笑しそうに小さく笑った。

「…そうか。真面目だな蓮は」

「そう、ですか？」

真面目と言われてもあんまりピンとこない。授業中はよく寝てるし、宿題も時々やって来ないし、部屋も本だらけで整理整頓されていないし…。蓮はうーんと首を傾げた。

やっぱり自覚がないのかと、洗った手を手拭いで拭きながらティルは思った。

「何はともあれ、俺は準備してくる。蓮は納戸から外套を持ってきてくれ」

「外套って、大きいマントみたいなやつですよね？」

「ああ、このあたりは街の外れであまり人はいないが、もし見つかったら大変なことになる」

確かに世界を滅ぼす双黒の聖霊姫らしい私が見つかったら、そりゃあ大変なことになるだろう。それぐらい蓮にも分かった。

「分かりました！すぐ持ってきますー！」

思わずビシッと敬礼をして、蓮は直ちに納戸へ向かった。

？

用心したものの運良く誰にも会わず、朝から太陽が真上近くまで昇るほど歩いたその時、突然鬱蒼とした森が開けた。

思わず蓮は目深に被っていた外套のフードを取った。地平線の彼方まで続く荒れ地が広がっていて、元は家だと思われる廃墟や瓦礫の山々と、地面にこびりついている申し訳程度の緑が目に入る。

「ここが風化の街だ」

何とも寂しい場所だと蓮は思った。足を踏み入れしばらく歩いて、動くものは何も無く、白い瓦礫の山が数え切れないほどいくつもいくつも点在しているだけ。

あまりにも心細くなってしまつて蓮はテイルの側に近寄つた。顔を見上げると、彼は眉根を寄せて難しい顔をしていたが、しばらくして口を開いた。

「…遙か昔、ここは聖霊神がおわす聖地だったらしい。様々な植物や動物たちと人間たちが共存し、それはそれは豊かで美しい森だったそうだ。だが、人口が増えるにつれ森は伐採され石は切り出され、動物は殺されあつという間に森は無くなってしまった。それに激怒した神が一日で全ての人間を消してしまった。それで風に化した街、即ち風化の街と言われていると伝承が残っている」

「そんなことが…だから…こんなに…」

寂しくて悲しい、それでいてどこまでも蒼く澄み切った空が変わらずに優しく、まるで、夢の中のあの声のよう。

その時、テイルが何の前触れもなく立ち止まった。

蓮がどうしたんですかと聞く前に、突然斜め前の数メートル先の瓦礫の山に手のひらを向け早口で何かを唱えた。その同時にバチツと静電気の数倍大きくしたような音と、彼の手が一瞬青白く瞬いた。その瞬間青い電光が走り瓦礫の山にぶち当たった途端、爆ぜてその奥から何とも言えないおぞましい叫びが上がった。

「噂は本当だったか」

次々と瓦礫の影からゆらりと何かが姿を現した。蓮は思わず小さな悲鳴を上げる。

それはそれはおぞましい姿だった。頭は犬、体は二本足で立つ真っ白なゴリラ、そして蛇のような尻尾を生やし色々な動物を縫い合わせたような、目が黒く瞳孔がぎらぎらと真つ赤に輝いている。くそつとテイルが厳しい表情で悪態を付いた。

「中級クラスが六体…まさかこんなに…」

「これが妖魔…」

「いいかレン。俺が合図したらあの瓦礫の影に隠れるんだ」

テイルは妖魔にまだ塞がれていない瓦礫の方向を指差した。

「でもテイルさんは…」

「心配するな、俺なら大丈夫だ。いくぞ…行け!!」

蓮はテイルの言葉を信じて、脱兎の如く走り抜け瓦礫の影に滑り込んだ。瞬間、再びテイルの手から先ほどより強い青白い閃光が迸

り、妖魔たちの悲鳴が轟いた。

あまりの恐ろしい声にしゃがんで身を竦めていると、突然ぬつと大きい影が入り込み息を飲んだ。

「怪我は無いな？走るぞ」

正体はティルであつた。ほっと息を付く間もなく、ぐいっと手を引かれ走り出した。

「すまない…蓮を連れてくるべきじゃなかった…」

苦々しい顔のティルのその言葉に、何度も首をふった。

「私が我が儘を言つたんです。ティルさんは悪くないです」

「…蓮ならそう言うだろうと思つた。しかし状況は良くない。早く師匠たちを見つけないければ…」

背筋がゾツとする、背後から妖魔たちの怒り狂つた怒号が響いてきた。

「で、でも二人の居場所なんて分かるんですか？」

「師匠の魔力を感じる。おそらくこつちに」

ティルが言いかけたその時、そう遠くない前方から白い光が瞬き、微かに雷が落ちるような音がした。ティルがはつと顔を輝かせる。

「間違いない、師匠の雷術だ！行こう蓮！」

「はいティルさん!!」

大きく蓮は頷き、二人は瓦礫の山の中を走り続けた。

？

廃墟と瓦礫の山々が開け、壊れた噴水らしきものが中央に建つ、円状に広がる石畳の広場のようなところに蓮とティルは出た。

そこで見た光景は、先ほどとは比べ物にもならないたくさんの妖魔たちに襲われ応戦しているマエスタとアレンの姿だった。

「師匠！アレン！！」

ティルは雷術を放ちながら二人の元へと、蓮もその後を追いつながら駆け寄る。

「ティル！おお、レンも一緒か。すまないのレン、折角来たのに案内出来なくて」

「冗談言ってる場合かジジイ！」

かまいたちのような鋭い風で妖魔をぶっ飛ばしているマエスタが朗らかに笑っているのを見て、妖魔を片っ端から斬り倒しているアレンが怒鳴った。

「くそっ！きりがねえ！一体何なんだよこれは！！」

「おかしいのう…冬の前はなんともなかったというのに…」

思案しつつもマエスタは手を休めない。

「もしかしたら…レンが呼ばれたのも偶然ではないのかもしれない」

「えっ？」

「わたしの知らないところで世界の均衡が揺らいでいるのかもしれない」

「世界の均衡を危ぶまえに、これまですぐにかしなきやいけねーだろ！」

「師匠、突破口を作って逃げるのは…」

「いや、この数では突破口作ったところですぐに捕まるのが落ちじや」

「だったらどうしたら良いんだよ?!」

ジリジリと背後の噴水へと追いやられていく。

更に増幅していく妖魔。四人の脳裏に絶望という文字がちらつき始めたその時、一陣の風が吹きわたった。

“…姫…私の名を呼んで…”

頭の中に響く、優しくて暖かいあの夢の中の声。

（誰？あなたは誰なの？）

“貴女が呼んでくれれば…私は再びこの地に降り立つことができる

…”

（呼ぶ…？あなたの名前は…？）

“私たちの姫…私の名は…”

その時、隙をつかれアレンが剣を弾かれて、鋭く光る爪が降り下るされるのが目には入った。

ティルとマエスタがアレンの名を叫び、彼が死を覚悟した瞬間。

「…ユピテル…」

蓮が小さく歌うように紡いだその名前。

途端全ての妖魔が断末魔の悲鳴を上げ、苦しみもがきだし、そして蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

何事かと状況が読めずに目を見張る四人。

「な、なにが起こったんだ…？」

地べたに座り込むアレンが呆けたように呟いた。

するとまるで台風のような凄まじい風が吹き荒れた。身構えるも、不思議なことに四人には全く影響がなく、髪の毛一本なびかない。呆気にとられているあいだに、周りの景色が見えなくなった。

そして、台風が弾け消え現れたのは、あの夢の中と同じ美しい森だった。

“…ありがとう姫…私は緑風の聖霊神ユピテル…姫のおかげで眠りの守護からとかれた…”

「聖霊神って…えっ?! マエスタさんがいつてたあの…!!」

「そうじゃ…この地をお守りくださっている神じゃ…生きている間にこのお声を聞けるとは…なんて素晴らしい…!」

マエスタは感極まり涙目になっている。テイルも少なからず感動しているようで、アレンはただただ驚きっぱなしだった。

春の日差しのように穏やかで優しい声が聞こえるものの姿は見えない。この森自体が聖霊神のようだ。

“姫…貴女を喚んだのは今、再びこの世界に危機がおとずれているから…闇が光を侵食し、何者かが均衡を崩そうとしている”

「なるほどのう…妖魔が異様に出没しているのはそのせいか」

マエスタが難しい顔で納得したように頷いた。

“この世界を救うために私たちの姫…貴女の声で私たち聖霊神を守護の眠りから目覚めさせて…さすれば、私たちは再びこの世界に均衡をもたらすことができる”

蓮は何も答えなかった。否、答えられなかった。世界を救ってなど、あまりに凄いことを言われて、頭が追いついていなかった。

「そ、んな…私が世界を救うなんて…」

さつきはそんなバカなと笑ってすましていたが、実は本当らしくった。全く笑えない。

“いいえ、貴女にしか救えない…眠りにについている聖霊神は姫の声しか届かないから”

「…どうして私が聖霊姫なんですか？そんな特別な力とかもないし…もしかしたら私じゃないかもしれない…」

すると蓮の頭を優しく撫でるかのように、ふわりと小さい風が髪を揺らした。

“私たちは別の世界ながら、貴女が生をうけた時からずっと見守っていた…特に私は守護には付きながらも眠ってはいなかったから、ずっと貴女のことを…貴女が聖霊姫であるのはこの世の偶然であり必然…見間違うはずかない…そんな私たちの姫を危険に晒すようなことはしたくなかった…でもこの世界もとても大切…だから貴女に…レンにこの世界を救ってほしい”

大きくて穏やかで優しいものに包まれているような、安心した気持ちになれる。神様の切実な願い。聞きたいこと、不思議なこと、たくさんあったが。

「…私がこの世界を救えるかなんて分かりません…でも私にしか出来ないことがあるのなら…」

この世界に来て一週間ほど。とても綺麗で、優しくて、今さら見捨てるなんて出来そうになかった。ぐっと拳を握りしめ、前を向いた。

「私、やります」

“…ありがとう私たちの姫…”

ふわりと神様が笑ったような気がした。そして再び竜巻のような激しい風が巻き起こり、森が見えなくなったと途端に消え去って、何事も無かったような廃墟と瓦礫の山々の風景に戻った。

蓮は気が抜けてぺたんと石畳に座り込んだ。

「…大丈夫か？」

蓮が見上げると、少々心配そうなティルが手を差しのべていた。

「はい…」

手を伸ばして、彼の大きくて温かい手のひらに包まれて立ち上がった。

「…本当にいいのか？」

「えっ？」

「この世界を救うなど、レンには関係のないことだ。もしかしたら無事ではいられないかもしれない」

ティルの言う通りだ。それでも、蓮は決めたのだ。

「いいえ、私は関係無くてもティルさんたちには関係のあることです。それに私、この綺麗な世界をもっと見てみたいんです。だから、できる限りのことを、私はやります」

迷いはなかった。

「それならティル、お前もレンと共に行くのじゃ」

マエスタの言葉に、ティルははっと顔を上げた。

「お前はもう見習いというレベルではない。十分レンの助けになる

だろう。後、良かったらこの馬鹿孫も連れていってくれ」

「うるせージジイ。言われなくなつてオレは最初っからそのつもりだ」

アレンも蓮の隣に立った。

「レン、お前はオレが護つてやる。これでも元騎士だしな」

にかつと快活なアレンの笑顔を見て、蓮は心の奥が温かくなった。

「…ですが、師匠一人ではまた妖魔が現れたりでもしたら…」

「もうこの一帯は聖霊神がお目覚めになられたから大丈夫じゃろう。心配するな。それにお前はレンと共に行きたいのじゃろう？」

ティルは凶星を突かれたように一瞬言葉を詰まらせ、そして、大きく頷いた。

「ここから出たことのないお前にも良い経験となるじゃろう」

そして、マエスタは恭しく蓮に頭を垂れた。

「レン、いや双黒の聖霊姫。どうかこの世界を救ってくださいな」

こうして後に英雄と讃え歌われる少女の、世界に光と闇の均衡をもたらすための旅路が、開幕のベルを響かせ始まったのであった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8795q/>

---

英雄少女の狂詩曲

2011年10月8日18時08分発行